ツレヤん…？

yuunagi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ツレヤん・・・？

【Ｎコード】

Ｎ０２７４ＢＡ

【作者名】

ｙｕｕｎａｇｉ

【あらすじ】

入院中だったミカエルこと新堂慎は仲間たちに退院祝いの飲み会の席を設けられてそれに参加するが、途中で気絶してしまい宴は即、幕を閉じる。その翌日、慎は久しぶりに登校する私立夕凪学園に妹の新堂杏を背負いながら向かう。その道中、友人である菅谷涼や幼馴染である摺木麻耶と再会するのだが……。

プロローグ～ヒーロー凱旋～　前　篇　其の一

――市内某所。

人々が賑わいを見せる繁華街……。

仕事帰りのサラリーマンなどが居酒屋に立ち寄り、酒を飲みながら談笑を交わす騒がしい場所から少し離れた路地裏には一見さんにははばかられる一軒のバーがあった。

Ｂｒｏｋｅｎ　Ａｎｇｅｌ　Ｗｉｎｇｓ（翼が折れた天使）と怪しく光るネオン看板が軒先に下げられ、クリスマスでもあるまいし色鮮やかに光の装飾が施された外装のバーにぞろぞろと入って行く不審な人物たちがいた。

その者たちは服装こそパーカーやらスーツ、ドレスと統一性がないものの一つだけ共通点があった。それは彼らの服装のどこかには必ず白い翼のブローチが付いていた。

彼らはバーに入るすんでの所で持参した仮面を付けて店内に入って行く。傍から見れば仮装パーティーの参加者たちに見えなくもないメンツである。

店内は薄暗く、カウンター席とテーブル席があり、パーティーをするには少々狭いフロアながらも先着順から空いている席に通され。残った者は案の定、立ち飲みとなった。

人でひしめきあう店内だったが一席だけ――テーブル席が空いているにも関わらず誰もそこには座ろうとはしなかった。誰かのために残しているような風にも見受けられる。

そのテーブル席の傍には演壇があり、各々好きな飲み物を手に取った者が次々と演壇に熱い視線を送り始める。特に何かがあるわけでもないそこに視線を向ける必要があるのだろうか？

すると、突然店内が真っ暗になり来場者たちが少しざわめき始める。それを見計らって演壇に向けてスポットライトが照らされ、何

かに気付いた来場者たちは歓喜して店内が少し揺れ動いた……。スポットライトの先には白と黒の対極的な色ながらも左右対称で目元には水滴模様が描かれた仮面を付け、白いワイシャツに白い翼のブローチを身に付けるその下にはジーンズというラフな格好をした人物が立っていた。

仮面の人物は歓喜に沸いた来場者たちをなだめようと両手を小さく上下に動かして、キザな対応をとる。

しばらくして、店内は静寂に包まれて仮面の人物は自分の姿を後方にいる者にも見せつけようと演壇の縁まで足を運んで丁寧にお辞儀をして、徐に口を開いた。

「――皆さんお久しぶりです。無事、この地に舞い降りる事が出来てこれも皆さんのおかげだと思います。ありがとう」

静かにそう語ると来場者たちのボルテージが再び上がって店内がまた揺れ動く。仮面の人物は再び来場者たちをなだめて制止させる。

「――ゴホン、えっと……まどろっこしい事はナシにして皆でパーっとやりましょう！　かんぱ～い！」

右手に持っていた何も入っていないグラスを掲げて乾杯の音頭を取ると来場者たちも仮面の人物に釣られて一斉に「乾杯！」と嬉しそうに告げた後に飲み物を一気に飲み干して各々談笑に入った。

仮面の人物はゆっくりとした足取りで演壇を後にして、演壇の傍にある――彼のために空けられていたテーブル席に腰を掛けると小さく息を吐いた。

久しぶりの集会で緊張していただけにボロを出さずに無事終えてホッとしたようだ。

「お帰りなさい、ミカエル」

テーブル席に腰掛ける仮面の人物の事を「ミカエル」と呼んで何のためらいもなく隣に腰を掛けたボブカットの少女は蝶をモチーフにした仮面を付け、服装もどこかの制服なのだろうか、セーラー服の上にエプロンを着用していた。

少女はさり気なくミカエルと呼んだ人物の前に飲み物が入ったグラスを置き、それにミカエルは手を伸ばして飲み物を口に含んだ。すると、ミカエルが突然、飲み物を勢い良く噴き零して苦しそうにむせ返る。

「……コレ、何？」

「健康ドリンク？」

「何故に疑問形？」

「いや、お――マスターが『祝いだ、持ってけ』って……」

少し申し訳なさそうに語りながら少女は自分たちが座るテーブル席の向かい側にあるバーカウンターに視線を向け、ミカエルも少女に釣られるように視線を向けた。

視線の先にあるバーカウンターには雑貨屋によくある定番の髭メガネを付け、親指を立てて口元を緩め白い歯を光らせる中年男性がいた。

そんな中年男性の姿に二人は額を押えて大きく嘆息をした。

「で、コレの中身は何？」

「……知りたいの？」

「いや、やっぱやめとくわ。世の中には知らなくても良い事があるもんな……」

「うん、私もそれには同感……」

意見が合った二人は謎の液体が入ったグラスに視線を向けて凝視した。

グラスに入った液体は無色透明で一見普通の飲料水に見えなくもない代物なのだが、先ほどの事があるので普通の飲料水ではないのは明らかだった……。

「でもさ、飲む前に気付かない？」
「え？　何が？」
「コレ、結構臭いよ……」
顔を引きずりながら徐に鼻を摘む少女にミカエルは首を傾げる。
「生憎、鼻が詰まってて良く分からん」
「そう。それは不運と言うべきか幸運と言うべきか悩む所ね」
「そんなにヤバい匂いなのか？」
「うん。ミカエルが話す度に匂いが来るよ」
「マジか。それは……うん、ごめんなさい」
「いやいや、こちらこそ何かごめんなさい」
互いにお辞儀の応酬でしばらく変な流れが続いた。談笑していた来場者たちもそのおかしな光景に気付いて、怪しげな笑みを浮かべながら二人のやりとりを見つめる。ニヤニヤと自分たちを見つめる視線に気付いた二人は頭を掻いて照れながら苦笑いをした……。
すると、仕様もない所をメンバーに見られてしまったミカエルが名誉挽回と言わんばかりに突然、グラスを手に取って立ち上がった。
その行動に来場者たちは湧いたが少女だけは違った。ミカエルが手に取ったグラスは未だに原材料が分からない物を使用して作られたあの謎の液体が入ったグラスだった。そして、ミカエルがこれから何をしようとしているのかは流れ的に理解出来ている少女は少し顔を引きずりながらも心配な眼差しで彼を見つめる。

『一気！　一気！　一気！』

手拍子を交えながら一気コールが店内に響き渡る。
その勢いに身を委ねてミカエルは謎の液体が入ったグラスを口元に近づけるとためらう事なく口に含んで、喉を鳴らしながら一気に飲み干した。飲み干して空になったグラスを掲げると店内は歓声に包まれて、ミカエルは口元を緩める……。

会場の反応に安心したのか――突然、ミカエルはグラスを掲げたまま前方のテーブルに倒れ伏せる。卓上の物は全てその衝撃で転げ落ち、床一面に飲料水が飛散した。

唐突の事で呆気に取られた面々だったが、良く見るとミカエルの身体が小刻みに震えており、痙攣している事に気付く。

『ミカエルーっ？』

店内に悲鳴が響き渡り、飲み会どころじゃなくなってしまい。久しぶりの集会は早々に打ち切られたのであった……。

プロローグ～ヒーロー凱旋～　前　篇　其の二

――ミカエルさんが来場しました。
ミカエル「こんばんは～」
ラファエル『こんこん』
ガブリエル〈こんばんみ～〉
ガブリエル〈今日、ミカエル再臨祭があったんでしょ？　どうだった？〉
ラファエル『どうもこうも……』
ミカエル「……」
ガブリエル〈？〉
ラファエル『マスター特製ドリンクを調子付いて一気飲みし、気絶しましたよ。折角の集会がパーです』
ガブリエル〈それはそれは、思い切った事をしなさった……〉
ミカエル「……すまん」
ラファエル『まぁ～いいですけど……。それよりもガブリエルさんはどうして来なかったんですか？』
ガブリエル〈そうだね～。おんにゃにょ子が離してくれなかったんだよねぇ～〉
ラファエル『……またですか』
ガブリエル〈仕様がないっしょ。だって、モテんだもん〉
ラファエル『はいはい……』
ガブリエル〈まぁ～あれだよね。ミカエルくん、無事でなにより〉
ラファエル『うん、お帰り』
ミカエル「何だよ、改まってさ。キモいわ」
ガブリエル〈素直じゃないねぇ～〉
ラファエル『でも、ミカエルらしいでしょ？』
ガブリエル〈確かに……〉
ミカエル「馬鹿にされているような気がするが……。でも、あり

がとう」
ラファエル『w』
ガブリエル〈今、悪寒が走ったわ……〉
ミカエル「捨てた女の怨念じゃね？」
ラファエル『ああ、それはありえるね』
ガブリエル〈……ヤな事言わないでよ～〉
ミカエル「ｗｗｗ」
ラファエル『ｗｗｗ』
ガブリエル〈もう、イジメはんた～い〉
ラファエル『子供ですか……』
ミカエル「さてと、そろそろ……」
ラファエル『そうですね』
ガブリエル〈だね～〉
ミカエル「じゃ～明日からまたよろしく」
ラファエル『こちらこそ』
ガブリエル〈よろしゅうに～〉
ミカエル「おやすみ～」
ラファエル『おやすみなさい』
ガブリエル〈おやす～〉
――ミカエルさんが退場しました。
――ラファエルさんが退場しました。
――ガブリエルさんが退場しました。
……。
……。
――レヴィアさんが来場しました。
レヴィア【渡さないわたさないワタサナイ……。絶対に渡さない。必ずアナタを救ってみせる。そして、今度こそ殺す。殺すころすコロス。ぜ～ったい、殺してみせるから。だから、だから――もう、どこにも行かないでずっと傍にいて……】
――レヴィアさんが退場しました……。

第一話～久しぶりの登校～　其の一

身体がダルイ。
いや、身体が重いと言った方が合っているのだろうか？
寝返りを打とうにも身体が思うように動かない。金縛りに遭っている……？
いやいや、そんな非科学的なモノは信じないぞ。それに金縛りって要は脳が起きているにも関わらず身体がまだ眠った状態で動かない事を指すんだろ？　でも、手だけは動くからこれは金縛りじゃない。だったら、何が原因なんだろうか？　目を開ければその原因が分かるのだろうか？
ふむ、このまま眠り続ける訳にもいかない、か……。
俺は原因を突き止めるべく、ゆっくりと閉じていた目を開ける。
徐々に明らかになって行く瞳に映る景色の中に馬乗りになってこちらを凝視しているセーラー服姿の人物が現れた。

「にぃに～、私を学校に連れてって」

上目遣いで媚びるように開口一番にアホな発言をした、ボサ髪童顔の八重歯が特徴的な小悪魔少女に俺は――開けた目をゆっくり閉じてもう一度寝る事にした。
うん、疲れているんだな、きっと……。だから、この部屋に居やしない少女の姿が見えるんだ。ナンマイダブツナンマイダブツ……。
これで少女の霊は報われた事だろう……。
さて、もう一眠り――グホッ！

「にぃに～起きてよ～。起きないと遅刻するよ～」

僕の身体の上で馬乗りになっていた少女がなかなか起きない俺に

制裁と言わんばかりに跳ねていた。その反動で少女の全体重が俺の腹部を圧迫する。

「分かった。分かったから腹の上で跳ねんな。吐くぞ、このヤロー」

観念して俺は目を開けて少女に苦言を呈した。

ようやく起きた俺の事を少女――新堂杏（しんどうあん）は何故か分からないが徐に鼻を手で摘んだ。

「……にぃに、臭い」

「これが年頃の少年の匂いだ。臭けりゃ～部屋に入って来るな」

「ぶぅ～」

フグみたいに頬を膨らませて拗ねた杏の膨らんだ頬を鷲掴みにして俺は杏が言う悪臭の元であろう口臭を吹きつけてやった。

あまりの臭さに杏の目が充血し、涙を浮かべながら苦悶な表情を浮かべる。だが、悪臭から逃げようにも俺に頬を鷲掴みにされて逃げ場を失ってしまった杏はそのまま白目を向き気絶した。

凄い効力だ……。昨日、あれほど噛むタイプのブレスケアを口にしたにも関わらずこれほどの威力を発揮するなんて、俺の身体に一体何があったんだよ……。

俺は小さく息を吐いて肩を落とした。

昨晩、気が付いたら行きつけの店のソファーの上だった。そして、何故だか俺の口に三重にしてマスクが付けられていた。

首を傾げながら、マスクを外そうとしたら俺の事を看病していたであろう桜乃美嘉（さくのみか）に腕を掴み取られて「外しちゃダメ！」と叱られてしまった。

何故、外しちゃならんのか状況を理解出来ていない俺に桜乃は優しく微笑み掛けながら俺の手に一箱の噛むタイプのブレスケア（グレープ味）を握らせていた。

俺はどうしてか手中に収めるそれを眺めていると目頭が熱くなって来ていた。それだけである程度の状況が理解出来たからだ。

……はぁ～。

俺は未だに腹の上で白目を向いて気絶をしている杏の襟元を掴んで引きずりながら部屋から放り出した。そして、扉を閉めるとドアの上段部分から順番に錠を掛けて行く事――八つ目を掛け終えて、俺はベットにダイブをして横になった。

ふぅ～、これで邪魔者は居なくなった。これで心置きなく、眠れ――ガチャン！

「にぃに！　どうしてこんなにも可愛らしい妹を放り出すかなぁ～？　考えられないよ！」

頬を膨らませながら部屋の中にドカドカと激しい足音を立てながら可愛らしい（？）我が妹が入って来た。

「……どこの世界にピッキングする可愛い妹が居るんだよ」

「ぴっきんぐ？　何、意味分かんない事を言っているの？　普通に開けただけだよ」

「じゃ～何だ、その細長い工具の数々は……」

俺は杏が手に持っていた、ピッキングに使用したであろう工具に視線を向けた。指摘された杏は証拠隠滅とばかりにすぐさま工具を懐に隠したがバレバレである。

「ヤダなぁ～にぃには……。杏は何も持ってないよぉ～」

「……なら、跳んでみろ」

「何、そのカツアゲ的な命令。にぃに、怖い～」

「そうか……。なら、身体検査だな」

俺は立ち上がって杏に近づいて行った。

「え？」

俺の発言に杏は素っ頓狂な声を上げて間抜け面をさらした。そして、言葉の意味をどう解釈したのか分かりかねるが突然、頬を紅く染め瞳をうるうるとさせて少し怯えたような視線をこちらに向けて

来た。
「……優しくしてね。にぃに」
「はい？」
甘ったるい声で発せられた杏の言葉に僕は首を傾げた。
えっと……どう対応したらいいのか分からん。
「ほら、早く。ここがドクンドクンって、なってるよ。にぃに……」
杏は俺の腕を掴むと徐に自らの胸に俺の手を押し当てた。触れられた杏は声を殺して堪えていたが、正直の所そこは何もなく見渡す限り水平線が広がっていた……。
「……ね？　ドクンドクンってなってるでしょ？」
頬を紅く染めて恥ずかしそうな表情を浮かべながら杏は口走った。だけど、
「ああ、そうだなぁ～。虚しさだけが心に染みる……」
俺は押しつけられていない空いた腕を自分の胸に置いて、猛省した。
言葉の綾（？）とは言え、妹の慎ましい胸を触らせてもらう変態的な流れを作ってしまい申し訳ない。妹よ、これからだ。これからお前の平地に立派な双丘が出来上がるだろう……。だから、めげずに頑張れよ、杏……。
「……ね～、にぃに。何で涙ぐんでいるの？」
「それはね。男の子だからさ」
「男の子は女の子の胸を触りながら泣くの？」
「そうだねぇ～。だけどね、これは神様の不公平さに悲観した涙なんだ」
「不公平さ？」
「そうだよ。こうして女の子（妹だが……）のお胸を触れさせてもらっているのに得るモノがないんだ」
「それって……どういう事？」
「つまり、掴め――グフッ！」

「にぃにの馬鹿！　変態！　モ〇ボ〇！」
ガチャン！　と杏は扉を勢い良く締め、俺に鳩尾への打撃による痛みだけ残して出て行った……。
ふん、これでいいさ……。その悔しさをバネに立派になるんだぞ、杏……。
杏の攻撃が心にまで響き、俺は膝から床に崩れ落ちてそのまま床に倒れ伏せた。
……。
……。
……よし、学校に行く準備でもするか。
俺はさっさと起き上がってクローゼットから制服を取り出して着替え、桜乃に渡されたマスクを即身に付け、噛むタイプのブレスケア（オレンジ味）はスクールカバンに忍ばせて自室を後にした。
俺の部屋を怒って出て行った杏が玄関先で靴を履いており、俺の姿を見るや否や舌を出して憎たらしい態度を取って来た。だけど、先に靴を履き終わったにも関わらず座ったまま動こうともしない杏の姿を見て、僕は嘆息をした。

また、か……。

頭を掻きながら俺も靴を履いて、徐に杏が座る前に腰を下ろした。すると、待ってましたと言わんばかりに杏が俺の背中に乗りかかって来て、俺は杏が落ちないよう支えながら立ち上がって背負う形になった。
杏が俺の部屋に忍び込んで目覚めた俺に向かって開口一番に言った言葉通りだ。私を学校に連れてって、つまり俺が杏を背負いながら一緒に登校する事である。

「じゃ～出発進行！」

俺の背中ではしゃぎ始めた杏に呆れながら、俺たちは学校に向けて出発した。
外を出てしばらく歩いていると案の定、近所の方々が奇異な視線で俺たち兄妹の事を見つめて来たが、別に気にならなかった。
ほぼ毎日の事で慣れてしまっているからである。ホント、慣れって怖いよな……。
だけど、幼い頃からこんな仲睦まじい間柄ではなかった。もう少し、ドライな関係だったと思う。ドライと言っても全く口を利かなかった訳ではない。ここまで身体を密着して接し合う仲まででではなかった。
杏が言うには空白の三年間の埋め合わせだそうだ。
ふむ、埋め合わせを補うためにここまでベタベタされちゃ～困るんだがな……。一応、血の繋がった兄妹とは言え、お互い年頃の少年少女なのだから周りの目も気にしてくれ……。
「ねぇ～。にぃに」
「何だ？」
「昨日、どこに行ってたの？」
「どこだっていいだろ？」
「ぶぅ～。必ず尻尾を掴んでやる」
「……そんな活力があるなら自分の足で学校行けや」
「ゴホン、ゴホン。ごめんね、にぃに……。いつも杏の身体を心配して背負ってくれて……。杏、嬉しいよ」
「その病弱キャラはこれで何回目だ？」
「びょうじゃくきゃら？　にぃに、酷いよ～。杏が昔から身体が弱いのを知っているくせに、ゴホン……」
「はいはい」
聞き分けのないアホな妹の話を軽く流す事にして俺は黙々と足を進める事にした。俺の華麗なる対応に杏はこれでもかと言うほどにワザとらしく咳き込み始める。背中から聞こえる耳障りな咳を無視しながらしばらく足を進めていると突然、肩をポンと叩かれた。

俺に無視されて痺れを切らした杏が注意を引くためにやったんだと思いながら、無視しているとまた肩をポンと叩かれた。先ほどよりも強い力だった。

「何だよ、杏」

そう言いながら俺は視線を後ろに向けると杏じゃなくてニヤニヤと気色の悪い笑みを浮かべる制服姿の美少年がいた。

「相変わらず、仲がいいねぇ～。お二人さん」

シャレた髪形をした茶髪に端正な顔立ち、やや細身のチャラ男こと菅谷涼（すがやりょう）が俺に背負られている杏の頭を撫でる。

涼とは中学の時に知り合い、現在はお互い別々の学校に通っているもののたまにこうして登校時に出くわしたりする。

「お前、時間大丈夫なのか？」

彼が通う学校は僕らのように徒歩で行ける距離じゃなく電車を使用して行かなきゃならないような場所にある。だから、友人として悠長に歩く彼の事を少し心配した。

「大丈夫大丈夫。しっかりシフトがオツムに入っているからこのまま行けばギリギリ間に合う。んな事よりも留年生は大丈夫なのかい？」

「誰が留年生だ」

「え？　進級出来たん？」

「まぁ～ギリな……」

「なぁ～んだ。てっきり留年したと思ってたから、慎（しん）をからかおうとわざわざ遠回りまでしたってのに、無駄足かね……」

「最低だな、お前……」

はぁ～、と俺は嘆息を吐いた。

俺は別に成績の影響で留年しかかった訳ではない。一年の秋辺りに入院する事になり出席日数の都合で留年を危ぶまれた。だけど、前半休まずにがんばったおかげかその貯金でプラマイゼロで事無き

を得る事が出来たのだ。
「でもさ～。にぃにも不運だよねぇ～。襲われた女の子を助けようとして果敢にも首を突っ込んだのは良かったものの、その結果が長期入院に留年ギリセーフの心臓バクバクコースを選んじゃったんだもん」
「杏ちゃん杏ちゃん。その女の子からしたら慎兄ちゃんは正義のヒーロー様だから、あまり言いなさんな。まぁ～第一、その女の子を襲った犯人様までもかばっちゃうほどのお人良しさんに言ってもしょうがないけどね～」
そう言いながら俺の事を怪しんでジト目で見つめて来る涼に俺は堂々とした態度で睨み返した。
「ホント……おっかないな～。だけどさ、心配して言っているってだけは分かってちょうだいな。第一、目撃者が慎と――」
「おはよう、新堂くん。杏ちゃん」
と、突然俺たちに挨拶だけを投げかけて少女がスタスタと歩いて行った。
「わお！　これはツイてるね～。まさか、摺木嬢に会えるとは……」
前方を歩く少女の背中を見つめながら言った涼の頬は緩んでいた。
摺木麻耶、容姿端麗、文武両道。クールな立ち振る舞いとそのルックスから他校生の男子までも虜にするモテモテ美少女だ。
腰の辺りまで伸びた黒のツインテールに前髪も綺麗に均等に整えられ、モデルのようなスレンダーな身体付き。体型にぴたりと合った我が校の制服姿が凛々しく、常に欠かさず身に付けている白色の手套が気品に溢れており、奥床しい乙女然とあまり肌を露出しない彼女は俺の背中にいる寸胴とは大違いである。
摺木と幼馴染の俺としては彼女の著しい成長に少し戸惑ってしまう事しばしば……。
「ホント、麻耶姉～はいつ見ても綺麗だなぁ～」

摺木の魅力に同性である杏が見惚れてしまったようだ。そんな、我が妹に友人の涼は優しく微笑み掛けながら杏の頭にポンと手を置いた。

「大丈夫さ、杏ちゃん。これから劇的に成長するよ」

「本当？　涼兄～！」

「ああ、本当さ。数年したら杏ちゃんもボンキュッボンになってるさ」

「キュッキュッキュッじゃなくて？」

「うんにゃ～。キュッボンキュッじゃなくてね」

『うひひひ～』

何の笑みか知らんが二人して口元を隠しながら気色の悪い笑み浮かべる。その姿は傍から見ればこれから悪巧みをしようとしている小悪党にしか映らないだろう。

「アウッチ。僕とした事が、摺木嬢の連絡先を聞くのを忘れていた……」

突然、額を押えて涼は悔しそうに口走る。

「いや、涼兄には無理だと思うよ」

「む、今の言葉は聞き捨てならないねぇ～」

「だって、麻耶姉の浮いた話なんて全然聞かないもん。そもそも、男の子には興味がないんじゃないかって、言われているぐらいだよ」

「……お前って、そういう類の話好きだよなぁ～」

確かに摺木の浮いた話なんて聞いた事がなかった。ほとんど、どこぞの有名な男子生徒をこっ酷く振ったやら、同性から告白されたなどの仕様もない噂話が校内では飛び交っている。

「うん！　噂話は淑女の嗜みってね」

「絶対違うと思うぞ～」

「僕も同感～」

「ぶぅ～ぶぅ～」

自論を否定されて拗ねてしまった杏をスルーする対応に至った俺

たちは途中まで一緒に登校し、しばらく進んだ先にある交差点で涼は駅がある方向へ、俺たち兄妹は学校がある方向に別れて、各々が通う学校に向かった……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0274ba/

ツレヤん…？

2011年12月31日18時53分発行